想

原野（はらの）　昇（のぼる）

本

「今」、「ここ」にいない人に思いを伝えるために人類は文字を発明した。その文字を記すのに、岩、石、亀の甲、骨、木、竹、金属、粘土板、ろう版、パピルス、羊（獣）皮紙などさまざまな物を利用してきた。そしてたどり着いたのが紙である。ということは、記録のための素材は今後、紙以外のものになる可能性があるということである。現に今、紙媒体の書籍の出版部数は年々減っていき、代わって電子本の産出が増大している。

それでは紙媒体の書籍は今後、パピルスや羊皮紙がたどったような運命をたどるのであろうか。

確かに、個人レベルでも、小さなチップに何十巻もの図書が記録されたものが手のひらの上で利用できるし、図書館レベルでは、オンラインを通して、何万巻の図書が世界中の何千万人もの利用者に常時提供されている。今やその便利さは紙媒体の書籍がとうてい太刀打ちできるものではない。おまけに書籍が占めざるを得ないスペースの問題が、家庭内においても図書館においても、大きなネガティブな問題として立ちはだかっている。図書を配架する場所がなく、邪魔物扱いされることさえある。

しかしここで立ち止まってみたい。本の役割はすべてスマホ、タブレット、パソコンで置き換えられるものであろうか。確かに本の重要な役割は、そこに詰め込まれている情報の伝達であり、それは電子機器上でも再現され、人はそれを視覚を通して受け取ることができる。しかしそれはバーチャルなもの、仮想空間であり、スイッチが切られた瞬間に消えうせる。

それだけではない。書物を手にして読んでいる時、視覚だけが働いているのではない。手にかかる重みを感じる触覚をはじめ、五感がすべて連動して働いている。身体は常に五感を総動員して刺激を捉えているのである。電子画面では、書物を手にしている自分を取り巻く現実の空間感覚や手触り感が消えている。

（広島大名誉教授）